様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１０３

研究課題名（和文）１９世紀日欧米比較による「日本美術史」形成史の研究

研究課題名（英文）Study on the Historical Process of Forming "Japanese Art History" Through the Comparison of Nineteenth-Century Japan, Europe, and the United States

研究代表者
鈴木　廣之（SUZUKI, Hiroyuki）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：００１３２７０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本美術史の形成に重要な役割を果たした明治前半期（1870～80年代）における滞日欧米人の活動に注目し、明治期に受容された「美術」概念に基づく「日本美術史」形成過程の解明を目的とする。本研究では、アーネスト・Ｆ・フェノロサ（1853～1908）資料など関連資料の調査を実施し、多くの新知見を得て、冊子体の研究成果報告書を作成して成果の公表を図った。今後、1900年の『Histoire du l’art du Japon』（稿本日本帝国美術略史）による官製日本美術史を継承発展させた歴史体系の淵源を明らかにし、日本美術史の枠組の批判的継承とグローバル化に資することが期待される。

研究成果の概要（英文）：Designed as a project to gain a better understanding of the process in which “Japanese art history” was formed according to the concept bijutsu (fine arts) imported from the West in the Meiji era, this research examined the comparable situation between Japan, Europe, and the United States in the late nineteenth century. The investigators conducted on-site researches on materials related to Ernest F. Fenollosa (1853-1908) and other Western collectors of Japanese art, the outcome of which was compiled into a volume of research report and distributed to specialists of the field in Japan as well as the United States and Europe. By clarifying the process of updating the framework of a volume of Histoire de l’art du Japon the Meiji government published in 1900 according to the development of the field of study, outcomes of this research will be expected to provide a firm ground on which one can discuss critical takeover and globalization of the existing framework of art history.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本美術史　フェノロサ　アーネスト・サトウ　ウィリアム・アンダーソン　アンリ・チェルヌスキー　エミール・ギメ　チャールズ・フリーア

１．研究開始当初の背景

本研究の目的は、明治期における「美術」概念の受容に伴う日本美術史の形成史の解明にあるが、1900 年（明治 33）の *Histoire de l'art du Japon*（翌年『稿本日本帝国美術略史』として刊行）と、その前史となる 1889 年開校の東京美術学校におけるアーネスト・F・フェノロサ（1853～1908）および岡倉天心（1863～1913）による美術史講義に日本美術史の成立を認める従来の見解が踏襲されてきた。以下のような個々の研究が注目されるものの、日本美術史成立に至る 1889 年までの動向については包括的研究の進展が見られないのが現状であった。

(1) 国内外の研究動向

まず注目されるのは、近年の研究によって、日本美術史の形成過程で滞日経験をもつ欧米人の関心と研究が先行したこと、その前提として研究対象となる美術品の収集が不可欠であったことが明らかになった点である。なかでも、1873 年（明治６）から 1980 年まで滞日し『日本の絵画芸術』（*The Pictorial Arts of Japan*、1886）の著者として知られる英人医師ウィリアム・アンダーソン（1842～1900）については、彬子女王、村角紀子らの研究により収集品（現大英博物館蔵）の概要ならびに特色と著書の参考書目（江戸時代版本等）の解明が進められた。とくに、アンダーソンが 1879 年６月の日本アジア協会で発表した「日本美術の歴史」（“A History of Japanese Art”同年、協会誌 *Transactions of the Asiatic Society* に論文掲載）が欧米人による日本美術史論の嚆矢となった点は重要である。

アンダーソンとともに注目されるのは、駐日英国外交官でジャパノロジストの先駆者の一人であるアーネスト・サトウ（1843～1929）の関心が美術史に向けられていたことである。1879 年の段階で、両者による日本美術史の共著執筆の計画（実現せず）のあったことが知られるほか（『サトウ日記』９月 27 日条、萩原延寿『遠い崖』参照）、同年末の両者の関西旅行では法隆寺の金堂壁画の美術的価値を見出し、当時、興福寺北円堂に安置されていた伝定慶《金剛力士像》の写実表現を評価している点が注目される（鈴木廣之「誰が日本美術史をつくったのか？」『お茶の水女子大学比較日本学研究センター研究年報』４、2008）。

滞日欧米人の中では、日本国内への影響力の点で、1878 年に初来日し、米国出身の学者・行政官・コレクター・教育者として活躍したフェノロサは本研究の最重要人物の一人である。フェノロサについては、L・チゾム（1963）、久富貢（1980）、山口静一（1882）のモノグラフなど国内外の研究の豊富な蓄積があり、近年では自筆草稿の翻訳刊行、英文雑誌掲載の論文の復刻刊行が行なわれ、効率的研究が比較的容易な状況にある。これらの蓄積を日本美術史の形成史の観点から再点検する必要がある。同様に、日本美術に関連する欧米人の活動全般については、1980 年代以降に盛んになったジャポニスム研究の成果があり、国内外の膨大な研究の蓄積を本研究に活用することができた。

(2) これまでの研究成果と準備状況

研究代表者は前著（『好古家たちの 19 世紀』2003）の中で、1870 年代の古器旧物保護と調査の意義を論じ、博覧会など公的展示による古器旧物の価値の変容過程を明らかにした。本研究はこの成果を継承発展させるもので、同時期に登場した美術概念が結局、本書で予測したとおり、古器旧物を選別、取捨選択して 1880 年代後半の「古美術」概念定着の基礎をつくるに至ったが、その過程は、本研究の目的である日本美術史の形成史の解明にとって重要な視点を提供した。

２．研究の目的

本研究は、19 世紀後半における日・欧・米の美術をめぐる動向の比較から「日本美術史」形成の前提となる諸条件を求めながら、明治期に受容された「美術」概念を土台にした日本美術史の形成過程を解明しようとするものである。具体的には、1889 年（明治 22）開校の東京美術学校におけるアーネスト・F・フェノロサおよび岡倉天心による美術史講義に日本美術史の成立の契機を認める従来の見解に批判を加え、その前史となる国内外の事跡の解明に当たる。本研究ではとくに、日本美術史の形成過程に重要な役割を果たした明治初期（1870 年代～80 年代前半）における滞日欧米人の活動に注目する点に特色がある。

このような前提のもとに、本研究ではとくに、明治初期における滞日欧米人の活動が日本美術史の形成過程に重要な役割を果たした点に注目し、アンダーソン、サトウ、クリストファー・ドレッサー（英）、アンリ・チェルヌスキー、エミール・ギメ（仏）、ウィリアム・ビゲロー、エドワード・S・モース（米）らの業績を検証する。また、フェノロサの業績についても従来の説を批判的に捉えて再評価を試みる。

３．研究の方法

本研究は美術作品を含む関連資料の調査を主とする。そのため特定の理論上の研究方法が用意されているわけではない。従来に見られなかった着眼点として、滞日欧米人の動向への注目と、国内の関連動向との比較に本研究の方法に関わる特色がある。

また、次のような具体的な研究計画を立てた。①近代以前の日本美術の収集、調査、研究に関わり滞日経験のあるフェノロサ、ビゲロー、モース（以上米国）、サトウ、アンダーソン、ドレッサー（以上イギリス）、ギメ、チェルヌスキー（以上フランス）、ベルツ（ド

イツ）など、および岡倉天心、今泉雄作ら美術官僚の活動について、本研究に関連する国内外の現地調査を行なって資料収集する。②1886 年（明治 19）の天心らの関西宝物調査、1888 年の大規模宝物調査など、政府による調査の実態を明らかにする関連資料の収集を行なう。とくに宝物類の調査範囲と具体的な調査品の解明に留意する。

４．研究成果

各年度の実績については、以下に記すとおりである。全般的な成果については、①法隆寺金堂壁画の桜井香雲（1832～1895）筆の原寸大模写が大英博物館と東京国立博物館に所蔵されていることは従来から知られていたが、今回、東京国立博物館所蔵作品のうち 10 号壁《薬師浄土》模写の裏面に貼り付けられた文書が発見され、その内容からこれらの原寸大模写の制作経緯と時期とが判明した。②ホートン図書館をはじめとするハーバード大学の図書館と美術館に分蔵されたフェノロサ関連資料については、その概要が報告され、主要文献の和訳が公刊されているが、今回、原資料の調査を行なった。また、ボストン美術館では新出のフェノロサ鑑定書の調査を行なった。③アーネスト・サトウが 1879 年（明治 12）に敢行した関西旅行の行程を『サトウ日記』から復原し、実地調査を行なった。これにより歴史、文化、宗教にわたるサトウの学問的関心を具体的に知ることができた。④初期の日本美術収集については、英語圏、フランス語圏にくらべドイツ語圏ではその実態が明らかでなかったが、現地調査によりその概要を明らかにすることができた。

(1) 2012 年度の実績

自筆原稿を含むフェノロサ資料の調査を米国ハーバード大学（マサチューセッツ州ケンブリッジ市）で行なった。とくに同大学ホートン図書館と燕京図書館では自筆原稿と書簡類を含む一次史料の調査を、同大学美術図書館とフォッグ美術館では関連資料とフェノロサの収集品の調査を行なった。またボストン美術館東洋部では新たに発見されたフェノロサ収集の日本絵画に附属するフェノロサ自身による鑑定書の、同美術館附属図書館では同美術館の初期展覧会目録を含む稀覯冊子類の調査を行なった。

アーネスト・サトウについて、近代以前の美術に関する情報を豊富に含むサトウ編纂の『中部・北部日本旅行案内』（1881 年初版、1884 年改訂再版）に記載された奈良・三重・和歌山三県にまたがる旅行ルートの実地調査を行なった。本調査ではこの地方の有力社寺に継承された民俗文化財や仏教・神道美術にサトウが高い関心をもっていたことが確認できた。

フェノロサと親交のあった動物学者で日本美術コレクターのエドワード・Ｓ・モース（1838～1925）との往復書簡を含む関連資料について、所蔵先である米国ピーボディ博物館（マサチューセッツ州セーラム市）附属資料館が改装工事による閉館中であるため現地調査を断念し、同館の提供するウェブサイト上の画像データを検索・収集し、現地調査に代替した。また、フェノロサと岡倉天心ら、サトウと『日本の絵画芸術』（1886）の著者ウィリアム・アンダーソンが明治 10 年代（1877～1886）に奈良で行なった宝物調査について、関連する国内の資料調査を次年度に計画しているので、そのための予備調査を行なった。

(2) 2013 年度の実績

1871 年（明治４）に来日した美術品収集家・銀行家アンリ・チェルヌスキー（1821～1896）について収集美術品に関する資料調査をチェルヌスキー美術館で行ない、1876 年（明治９）に初来日した実業家で宗教学者・美術品収集家エミール・ギメ（1836～1918）と画家フェリックス・レガメー（1844～1907）についてギメの収集美術品と関連資料、レガメーの日本関連の絵画と滞日中の日記等の関連資料の調査をギメ美術館で行なった。ギメ美術館では法隆寺金堂壁画模写（６号壁阿弥陀浄土）の調査も行なった。大英博物館では、アーネスト・サトウが制作依頼し、その友人ウィリアム・アンダーソンが購入し、後に大英博物館に寄贈した桜井香雲筆の法隆寺金堂壁画模写（９号壁弥勒浄土）の調査を行なった。

昨年度に引き続き、アーネスト・サトウ編纂の『中部・北部日本旅行案内』に記載された奈良・三重・和歌山三県にまたがる旅行ルートのうち、未調査の奈良市、天理市など奈良県中心部の有力寺社について実地調査を行なった。サトウが有力社寺に伝わる民俗文化財や仏教・神道美術に関心をもっていたことが再確認できた。

フェノロサによる法隆寺、興福寺の宝物類の現地調査を行なったことが両寺の執務日記に記されていることが知られているので、サトウ、アンダーソンらによる両寺の調査も含め、執務日記の調査依頼を行なったところ、法隆寺からは了解を得られなかったため、現地調査を断念した。興福寺からは現地調査を認められなかったものの、史料の該当ページのデジタル画像の提供を受けることができた。これによって従来の図版では判読できなかった細部の記述内容の確認ができるようになった。

(3) 2014 年度の実績

米仏との比較対象として、ドイツ語圏における日本美術収集の草創期についての考察を得るため、ベルリンの東アジア美術館とウィーンの応用美術博物館を視察し、資料収集を行なった。1906 年に設立された東アジア美術館の収集母胎となるのは、風景画家ゲオル

グ・エーダー（1846～1931）、収集家エルンスト・グローセ（1862～1927）とその弟子で初代館長オットー・キュンメル（1874～1952）らが 1880 年代から私的に収集してきた絵画（版画を含む）であるが、オーストリアでは 1863 年に設立された応用美術博物館が一貫して日本美術の収集を担ってきた。その方針は自国の工芸の歴史を、日本を含む東アジア美術の影響の下に位置づける史観に基づく。

また、アーネスト・F・フェノロサの関連資料について、フリーア・ギャラリー（米国ワシントン市）とフィラデルフィア美術館（同ペンシルベニア州）で行なった。フリーア・ギャラリーでは、実業家で美術品収集家として知られ、同ギャラリーの基礎を作ったチャールズ・ラング・フリーア（1856～1919）の収蔵品のうち、フェノロサが開催した鑑画会（1884～）に出品したことが判明する作品と出品が推測できる作品、狩野芳崖（1828～1888）、橋本雅邦（1835～1908）、木村立嶽（1827～1890）作の６点の調査を行なうとともに、滋賀県園城寺で行なわれたフェノロサの葬儀の写真と関連資料、フリーア文書に含まれるフェノロサ書簡とメアリ・マクニール・フェノロサ夫人書簡、フェノロサ自筆ノート類の調査を行なった。フィラデルフィア美術館では、リジー・ミレット・フェノロサ夫人（一番目の夫人）に伝来し、フェノロサ旧蔵であることが確認できる狩野芳崖、橋本雅邦らによる絵画 14 点を調査し、関連資料の調査・収集を行なった。同館資料館では、フェノロサ旧蔵品の寄贈に関わる同館館長フィスク・キンボールとブレンダ・フェノロサ・ビドゥル（フェノロサの長女）との往復書簡の調査を行なった。

なお、具体的な研究成果については、鈴木廣之編『19 世紀日欧米比較による「日本美術史」形成史の研究（平成 24～26 年度科学研究費補助金研究成果報告書）』（東京学芸大学芸術・スポーツ科学系、2015）を作成したので、本報告書に掲載された研究代表者と連携研究者による論考を参照されたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
① 鈴木 廣之、「日本美術史」はどうのように形成されたのか？　19 世紀日欧米比較研究の成果から、鈴木廣之編、東京学芸大学芸術・スポーツ科学系、19 世紀日欧米比較による「日本美術史」形成史の研究（平成 24～26 年度科学研究費補助金研究成果報告書）、2015、pp.4-48

② 藤田 伸也、1879 年のアーネスト・サトウ関西旅行、鈴木廣之編、東京学芸大学芸術・スポーツ科学系、19 世紀日欧米比較による「日本美術史」形成史の研究（平成 24～26 年度科学研究費補助金研究成果報告書）、2015、pp.19-30

③ 尾関 幸、ドイツ語圏における東アジア美術コレクションの歴史、鈴木廣之編、東京学芸大学芸術・スポーツ科学系、19 世紀日欧米比較による「日本美術史」形成史の研究（平成 24～26 年度科学研究費補助金研究成果報告書）、2015、pp.31-34

④ 鈴木 廣之、「美術」前史−一八七二年まで、北沢憲昭・佐藤道信・森仁史編、東京美術、美術の日本近現代史−制度・言説・造型、2014、pp.32-61

⑤ 藤田 伸也、中国古代美術における時間と空間、論集 三重大学文学部哲学・思想系および教育学部哲学・倫理学教室、16 巻、2013、pp.58-68

⑥ 鈴木 廣之、古器旧物から美術へ−明治期の公的展示と過去の遺物−、美術フォーラム２１、28 巻、2013、pp.42-46

⑦ 藤田 伸也、中国絵画の伝統と西洋画法−画の六法と郎世寧、秋本ひろと編、三重大学出版会、因果の探求、2013、pp.145-157

⑧ 鈴木 廣之、明治期の正倉院−宝物の調査・展示・評価−、奈良国立博物館編、思文閣出版、正倉院に学ぶ、2 巻、2012、pp.3-19

〔学会発表〕（計２件）
① 鈴木 廣之、「美術」と「工芸」の近代と前近代：諸ジャンル形成の条件、シンポジウム：日本における「美術」概念の再構築（招待講演）、2014.11.8～9、福岡アジア美術館あじびホール
② 鈴木 廣之、明治期における日本美術史形成の端緒と過程、第 59 回東方学者会議（招待講演）、2014.5.24、東京・日本教育会館

〔図書〕（計１件）
① 鈴木 廣之 編、東京学芸大学芸術・スポーツ科学系、19 世紀日欧米比較による「日本美術史」形成史の研究（平成 24～26 年度科学研究費補助金研究成果報告書）、2015、80

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者

鈴木　廣之（SUZUKI, Hiroyuki）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：００１３２７０４

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
藤田　伸也（FUJITA, Shinya）
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：２０２８３５０９

尾関　幸（OZEKI, Miyuki）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：１０３６１５５２